

Title	きつねとゾンガラス : 秋成文学の一つの背景
Author(s)	姜, 錫元
Citation	詞林. 6 P.27-P.36
Issue Date	1989-10-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/67276
DOI	10.18910/67276
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

きつねとゾンガラス

秋成文学の二つの背景

美 錫 一元

一

作者秋成の死後十三年を経て刊行された『癩癩談』は、寛政三年、秋成五十八歳の頃にはその稿が成った作品で、秋成の文学や考え方を理解するに欠かせない作品である。同書で秋成は次のように述べている。

また、稱荷いさかのおさがりとて、をりをりうつしもうづる事あり。ここにあつまる人は、おのがもとありしよからぬ仕業しわざどもをも、今のころぎたなきことをも、あからさまにひあらはされて、猶なほおろかなる事のみを、いのりものすれど、大かたは、ころあくまでのしるしも見ず、おもきやまひも、およばぬねがひも、はたかひなくてやみぬるぞいとあちなき。(一)

秋成は「稱荷のおさがりとて、をりをりうつしもうづる」人の行為に對して、「はたかひなくてやみぬるぞいとあちなき。」と批判的態度を取っている。ところが、一方では、「大かたは、

ころあくまでのしるしも見ず、」と、「いのりもの」することに對しては、その「しるし」をある程度認める姿勢を見せている。

一つの事柄に對して相反する見解を見せている上記の文章は、秋成の文学や考え方を理解する上で何か示唆する点があるように思われる。即ち、秋成は「稱荷のおさがり」について、ある一面では現実主義、又は合理主義的考え方を持っているが、ある一面では非現実主義、又は非合理主義的考え方を持っているのである。

本稿では、上記の文章からも見られるように、秋成文学に見える対立する二つの概念の世界、その背景について、「きつね」と「ゾンガラス」という二つの素材をもって考えてみたい。

二

壁かべには蕙つたふし葛延くわえんかゝり、庭にわは禪ぜんに埋うもれて、秋あきならねども野のら

なる宿なりけり。さてしも臥たる妻はいづち行(き)けん見えず。狐などのしわざにやと思へば、かく荒(れ)果(て)ぬれど故住(み)し家にたがはで、廣く造り作りし奥わたりより、端の方、稻倉まで好みたるまゝの形なり。果(て)自(ら)足の踏所(ふみど)さへ失れたるやうなりしが、熟おもふに、妻は既に死(す)て、今は狐狸の住(み)かはりて、かく野らなる宿となりたれば、怪しき鬼(おに)の化してありし形を見せつるにてぞあるべき。(2)

以上は、『雨月物語』の「浅茅が宿」の一節で、主人公の勝四郎が七年目に我が家に戻ってきて、妻の宮木と一晩を過ごしたが、翌朝起きてみると、妻はいなく、荒廃した家ばかり目に入ったので歎く場面の描写である。これを見ると、作者は、宮木のいなくなった原因を、「狐などのしわざにや」と述べているし、荒れ果てた家の描写においても、「狐狸の住」と述べているのが分かる。続いて、同書の「吉備津の釜」に出る文章を見てみよう。

時うつりて生出(い)づ。眼をほそくひらき見るに、家と見しはもとありし荒野(あらの)の三昧堂にて、黒き佛のみぞ立(た)せまします。里遠き犬の聲を力に、家に走りかへりて、彦六にしか(く)のよしをかたりければ、「なでふ狐に欺(あや)まれしなるべし。心の臆(おそ)れたるときはかならず迷(まよ)はし神の魔(ま)ふものぞ。(下略)

この場面は、主人公の正太郎が、妻の磯良の亡霊に会い、氣

絶した後、正氣に返って、その場を逃れて情婦の袖の従弟である彦六に相談するところである。ここで、作者は、正太郎の氣絶した原因について、彦六の口を借りて、「狐に欺かれし」と述べている。このような場面の描写は、次の「貧福論」にも見える。

其夜左内が枕上に人の來たる音しけるに、目さめて見れば、燈臺の下に、ちいさげなる翁の笑をふくみて座れり。左内枕をあげて、「こゝに來るは誰。我に糧からんとならば力(ちから)童(わらわ)の男どもこそ参りつらめ。你がやうの老たる形してねふりを魔(ま)ひつるは、狐狸などのたはむるゝにや。何のおぼえたる術(わざ)かある。

これは、自分の寢室に現われた「黄金の精霊」に対して、主人公の岡左内が詰問している場面の描写である。以上三つの作品を見ると、いずれも非合理的な場面の描写には「狐」が登場しているのが分かる。『雨月物語』は怪異をテーマにしている。従って、そのような描写があつて不思議でない、と言えるかも知れない。しかし、『春雨物語』でも、

鬼の口ありたけにはたけて、「何事を云(ふ)ぞ。妹に我(が)子が目かけしと云(ふ)事聞(き)しかば、つよくいさめて、今は心にも出(き)ず。おのれ等狐のつきて狂(くる)みか」とて、膝立(て)直(な)し、(3)

とある。これは、同書の「死首のゑがほ」に出る一節で、妹の宗を五蔵と結婚させるため、五蔵の父親の鬼曾次を尋ねた元助

が、鬼曾次から結婚を拒まれる場面の描写である。同作品は、明和四年二月三日起こった所謂「源太騒動」で有名な実話で、怪異をテーマとする『雨月物語』の諸篇とは、その趣を異にしている一篇である。それでいて、やはり「狐」を登場させている。同書の「目ひとつの神」では、

あやし、こゝにくる人あり。背たかく手に矛とりて、道分ちまひしたる猿田彦の神代さへおもほゆ。あとにつきて、修験の柿染の衣肩にむすび上(げ)て、金剛杖つき鳴(ら)したり。其跡につきて、女房のしろき小袖に、赤き袴のすそ糊こはげに、はら／＼とふみはら／＼かして歩む。櫓のつまでの扇かざして、いとなつかしげなるつらを見れば、白き狐也。其あとに、わらはめのふつ／＼かに見ゆる、是もきつねなり。

とある。これは、「相模の國小よろぎの浦人」が歌の道を学ぶため、上京の際、「目ひとつの神」の一行に出会う場面の描写である。同作品は、『雨月物語』の「仏法僧」を連想させる程その構成に共通点が多く見えるが、ここで注目したいのは、『雨月物語』とは違って、ここでは「狐」が場面の描写に使われる単なる素材にとどまらず、一つの登場人物として、堂々と顔を出しているという点である。そればかりでない。引き続き「山ぶし」「いざいとま賜はらん」と、金がう杖とりて、若き者に、「是に取(り)つけよ」といふ。神は扇とり直して、「一目連いちもくれんがこゝに在(り)て、むなしからんや」とて、わ

かき男を空にあをぎ上(ぐ)る。猿とうさぎは手打(ち)てわらふ／＼。木末きすまにいたりて待(ち)とりて、山臥やまふしは飛(び)立(つ)。この男を腋(わき)にはきみて飛(び)かけり行(く)。法(は)しは、「あの男よ／＼」とて笑ふ。

の如く、妖怪たちは人間と一緒に笑いの世界を演出しているのである。怪異の描写として登場させた「狐」を、『雨月物語』から『春雨物語』へと深化させていった秋成にとって、ここに至って、狐を始めとした妖怪たちは、もう恐ろしい存在でなく、作者の愛情さえ感じられる存在になったと言っているであろう。

故に、狐は、秋成文学に一つの素材を与えたばかりでなく彼の意識世界まで支配していたと言えよう。その秋成の、所謂「狐観」の理解のため、『胆大小心録』を見ることにしよう。

三〇 佛氏云(ふ)。「神仏同躰」と。翁おもふ。佛は聖人と同じく、善根をうへて大樹とさかへさせ、ついに世かいを覆おほふにいたるべし。うき世の民に袖覆ふと云(ふ)。師しは小乘せうじょうのみ。神は神にして、人の修し得て神となるにあらず。(中略)我によくつかふる者にはよく愛す。我におろそげなれば罰す。狐狸に同じきに似たり。(4)

ここで、秋成は仏家という「神仏同躰」、即ち本地垂迹の説を否定し、神は人が修行してなる仏や聖人と違って、やはり神であり、「我によくつかふる者にはよく愛す」る存在だと述べている。これを逆に言えば、属性という面から見ると、狐は神

と同格になるのである。このような秋成の「狐観」は、同書の至るところで見えるし、また、それは確固たるものであった。ここで、同書の一二段を引用してみる。

一三 儒者と云（ふ）人も、又一僻になりて、「妖怪はなき事也」とて、翁が幽霊物がたりしたを、終りて後に恥かしめられし也。「狐つきも癩症がさま／＼に問答して、「おれはどこの狐じや」といふのじや。人につく事があらふものか」といはれたり。是は道に泥みて、心得たがひ也。狐も狸も人につく事、見る／＼多し。又きつねでも何でも人にまさるは渠が天粟也。さて善悪邪正なきが性也。我によきは守り、我にあしきは崇る也。狼さへよく報ひせし事、日本紀欽明の巻の始にしろされたり。神といふも同じやうに思はるゝ也。よく信する者には幸ひをあたへ、怠ればたゝる所を思へ。（下略）

ここでいう儒者とは、中井履軒をさす。秋成は履軒と仲が悪かったし、特に狐つきや幽霊の存在について激しい討論を行い、同一三段は、その経緯をよく伝えている。即ち、秋成は、履軒が「妖怪はなき事也」と主張しているのに対して、「是は道に泥みて、心得たがひ也」とばかにしてから、「狐も狸も人につく事、見る／＼多し」と反駁しているのである。そして、前の三〇段で述べた如く、属性という面で神と同格に置いて「我によきは守り、我にあしきは崇る也」と、全く同じ主張を繰り返している。それから自分の主張の正当性を立証するため、「日

本紀欽明の巻」の事例を挙げているのである。

秋成が自分の「狐観」を理論的に裏付けるため『日本紀』を引用したのは、同書の三一段にも、安永八年著した紀行文『秋山記』にも見える。そればかりでなく、秋成は、『胆大小心録』二九段では、履軒の主張を反駁するため、友人の細合半翁の経験談を紹介しているし、自分の経験談も二回にわたって紹介している。以上、秋成の「狐観」は確固たるものであった。

秋成は五歳の時に、重い痘瘡にかかった。その時、養父母が大坂の加島稲荷（現香具波志神社）に祈って奇跡があり、その生命をとりとめたと言う。その報いとして、秋成は享和元年六八歳に、六八首の和歌を加島稲荷へ献詠したと言う。この事を考えあわせると、秋成の「狐観」は信仰的なものであったとすら言える。

狐の存在については、当時それを認める側と、認めない側と大きく二つに分かれていた。例えば、秋成の文学や学問に大きな影響を及ぼした五井蘭州と賀茂真淵を見ても、前者は否定、後者は肯定の立場であった。では、ここで真淵の『国意考』を見ることにする。

（前略）人を殺も虫を殺も同じこと成を知べし。すべてむくひといひ、あやしきこと、いふは、狐狸のなすこと也。凡天が下のものに、おのがじ、得たることあれど、皆みえたること成を、たゞ狐狸のみ、人をしもたぶらかすわざをえたるなり。もし今往昔、人多く殺したれば、うまごに

報やせんと、おもふ人あれば、狸やがて知て、むくひの色をあらはして、なぐさみとすべし。たゞ人多く殺せしは、ほまれぞかし。もし此後もさる世にあはゞ、我なほ多くころして、富をまし、名を挙むとおもふには、狸もえよりがたし。然るに、かく治りては、さることもなければ、はへ、蚊を殺す、ら、いらぬことよといふ様になりて、僧にも狸にもばかさるれ。(5)

秋成の「狐信仰」は、以上の『国意考』からも分かるように、真淵の影響を受けたものであり、また、真淵思想の受容の背景には、前述した彼の幼年期の痘瘡による体験があつたと思われるのである。

さて、前に引用した『癩癡談』の続きを見てみよう。

老いたるきつね狸たぬきなど、さすがに、愚痴かたくなの人のころはうごかすれど、よき人、なほき人にむかひては、何のしるしを見ることがなく、これもまた、はてはいづちいにけむ。(下略)

秋成はここでも「愚痴かたくなの、人のころはうごかす」と、狐の存在を信じているのである。が、本稿で問題としたのは、秋成の、所謂「狐信仰」のことではなく、その「狐信仰」がどういうふうな彼の作品世界に投影したのか、という点である。前に触れた『胆大小心録』の二三段では、履軒が「妖怪はなき事也」と主張したのに対して、秋成が「狐も狸も人につく事、見るく多し」と反駁した形になっている。しかし、その論争

の発端を見ると、そこには秋成の「幽霊物がたり」がある。即ち、秋成が履軒に「幽霊物がたり」をしたところ、履軒が「妖怪はなき事也」と反駁し、「狐つきも癩症れんじやうがさまぐに問答して、「おれはどこの狐じや」(下略)」と、秋成の自尊心を辱めたのである。

同じく二六段にも次のように記す。

履軒は兄とちがふて、大器のやうにいふが、これもこしらへ物じや。老が幽霊ばなしをしたら、跡で「そなたはさつても文言なわろじや。ゆう霊の狐つきじや」と云(ふ)事はない事じや。狐つきといふは皆かん症やみじや」と、大に恥(ぢ)しめられた。

ここに出る「幽霊ばなし」とは、何の話か明らかでない。一三段の「幽霊物がたり」と同じものであるかと思われるが、もし「幽霊物がたり」という言葉にかかわれば、これは推測に過ぎないが、秋成は『雨月物語』が含まれた「幽霊ばなし」を、履軒に述べたかも知れない。

いずれにせよ、秋成は確信を持って、履軒に自分の「狐信仰」を納得させようとしたし、それができなくなると、後々まで、履軒を罵りながら、自分の考え方の正当性を、『胆大小心録』で立証しようとしたのである。一方、同書には、狐をめぐる履軒とのやりとりの他にも、狐が素材になった話がいくつがある。例えば、二八段には、湯にそがれた狐の話があるし、三五段には、「狸は又化かやうが狐より上手で、きつねほどはれだ、ぬ

事じや」という文章が、又七一段には、門徒宗に集まる人に対して、「狐のつきたるが如し」と皮肉る文章が見える。

秋成の文学作品に狐が登場するのは『雨月』以後の作品に限るのではない。初期の浮世草子にも、狐は大きな役割を果たしているのである。即ち、『諸道聴耳世間猿』の五之巻○「昔は抹香けむたからぬ夜咄」は、平野屋七左衛門という金持ちの各い親父を、幫間の磯右衛門等がたぶらかす話であるが、その素材は「狐釣」（狐は登場しないけれども）であり、『世間妾形氣』の四之巻○「息子的心ハ照降しれぬ狐の嫁入」は、岩井風呂の若子の身分としては日光屋和三郎という人參問屋の若旦那の正式の妻になれないと考えた小袖が、狐の報恩譚を利用し、姑を騙して、嫁入りに成功する話である。

以上からも分かるように、秋成文学には、「狐」が大きな役割を果たしており、その背景には、秋成の「狐信仰」があることを、認めざるを得ない。前にも触れたが、『春雨物語』の「目ひとつの神」には、妖怪たちが人間と一緒に、人間と共に笑いの世界を演出している。このような、妖怪と人間との関係は、同書の「樊噲」にも、次のように見える。

影のやうなる者三人、我（が）前に来て、うらめしげ也。
「餓鬼ならめ。物くはせん」とて、腰に付（け）たるを皆打（ち）拂（ひ）てあたふ。あつまりくらひて、嬉しげなる中に、笹取（り）出（で）て、高ね吹（き）たれば、驚きてかきけちたり。

もうここに至って、「狐」に代表される妖怪の非合理性は秋成の小説の要素となっているのではないだろうか。

三

履軒の反駁に対して自分の「狐信仰」の正当性を主張する秋成の論理展開について、中村幸彦氏は「経験による一種の合理主義の持主」（6）と述べておられる。注目すべき指摘であると思われる。そこで、秋成の合理主義、又彼の作品との関係について、「ソングラス」を中心に考えてみたいと思う。

『諸道聴耳世間猿』に、
それ治まれる代の弓ハ弦をはづし、槍ハ鞘に錆ついて、古道具屋に幾世へぬらん。我見ても久しくなりぬるが、金百疋にまけてくれまいかと、一僕つれたお侍が、その槍でまさかのときハ、殿の御役にたつ事か。今の世ハ城より算盤を枕にして、御馬のさきで、銀貨る工面。（7）
とある。これは、同書一之巻○「要害は間にあはぬ町人の城廓」に出る一節である。作者は同書の最初から「今の世ハ城より算盤」と、強く現実的考え方を見せている。このような傾向は、同書一之巻○「貧乏は神とどまり在す裏かしや」にも見える。是が神の罰といふ物なら死れた古太夫殿ハどうでござる。こなたぐらんと違ふて、神道のちんぶんかんを覚へぬいてゐられたけれど、一生乞食同前で死れたでハないか。常常

こなたの役にもたたぬ神たたきが気にいらぬ。

これは、乞食のような生活をしているけれども、信心深い妻のおゆふが、神道者である夫が病死し、娘のおしでは遊女になつたので、「役にもたたぬ神たたき」と絶叫している場面の描写である。「今の世ハ城より算盤」とか「役にもたたぬ神たたき」とかという表現は、そのまま秋成の考え方とは言えないかも知れない。しかし、秋成の現実主義的考え方は、『書初機嫌海』や『癩癩談』、そして『胆大小心録』など、至るところで見付けることができるし、怪異小説である『雨月物語』のなかでも「貧福論」は、彼の経済観を知るに格好の作品となつてゐる。従つて、上記の『諸道聴耳世間猿』の一節は、秋成の現実主義に根ざしていると考えられよう。

では、このような秋成の現実に立脚した合理主義的考え方は、いったいどこから来るものであろうか。この点については、もともと浮世草子という作品自体の持っているリァリスティックな性格から解釈すればいいのかもしれない。しかし、これだけでは他の作品に見える、秋成の合理主義的考え方は理解できないのではないだろうか。

『七十二候』を見ることにする。

星河横空 月桂落子

天文曆數の士に星河の事を問へば、聊かならず説たがへり。窮むべからぬを窮めて何せん、(中略)日は天照大神、月は月讀の尊とひたぶるに言ひ窮むる人うたてし。今は眼鏡

の制工妙にして、是をもて望み見れば、神とて木に刻み繪に寫す人の形に等しき物に非ず、(8)

同書は、文化二年秋成七十二歳の作品であるが、秋成はここで、月や日を「眼鏡の制工妙にして、是をもて望み見れば」云々と述べている。次は、『胆大小心録』を見てみる。

一〇一 月も日も、目・鼻・口もあつて、人躰にときなしたるは古傳也。ソングラスと云(ふ)千里鏡で見たれば、日は炎々たり、月は沸々たり、そんな物ではござらしやらぬ。い中人のふところおやじの説も、又田舎者の聞(い)ては信ずべし。

ここの「い中人」とは本居宣長をさす。秋成が宣長と仲が悪かつたことは周知の事実で、二人は、神武紀の年数、日の神の解釈、儒仏二教のこと、そして、上代人音の有無などについて、激しい論争を繰り返したことがある。二人の論争は、勝敗のけじめがつかないまま終つてしまつたが、秋成は宣長に対して怒りを抑えきれなかつたようで、彼の作品の至るところで宣長を罵倒している。同段の宣長批判も、このような脈絡から見ると、きであるが、ここで注目したいのは、「ソングラス」である。秋成が「ソングラス」をもって宣長を批判したのは、次の『文反古』にも見える。

又一人の翁が、月日は吾邦に生れたまひて、あまねく世を照したまへば、いづちの國も奴隷と申て来たりつかふべしといふは、私の中にもおろかなる至なり、今存半我良須と

「鏡もてみれば、かたち正しくさだまりたるにあらず、是を太陽太陰の精と云、國のことわりにうなづく人多し、神代物がたりの奥嶺遠瀾、究めずしてよし、しひていふ人は無識也」と云しはよしともよし、(『ふみほうぐ』下の「難波の竹斎に」)(9)

「ソングラス」については、文化二二年杉田玄白の著した『蘭学事始』に、「彼船より、ウエルガラス天鏡、テルモメートル兼羅盤(中略)ソングラス觀日玉・ルーブル呼遠筒といへる類ひ、種々の器物を年々持越し」(10)と、「觀日玉」として見えるし、文政七年平田篤胤の著した『古道大意』にも、「天文地理に委しく無くてはならぬ事ゆゑに、(中略)種々測量の道具を拵へ、譬へば日月星の有形などを見んとては、望遠鏡、遮日鏡を拵へ」(11)と、「遮日鏡」として見えるが、すでに、宝曆一三年青木昆陽による『昆陽漫録』にも、「或ノ云ク、阿蘭陀ヨリ来ル、日ヲ觀ソシカラスト云フビイドロハ、仮瑠璃ナルベシト」(12) (傍点は原文のまま) のように見える。

「ソングラス」は、陰陽師や迷信によって支配されていた当時の宇宙観を、大きく揺るがした画期的なものであったし、一つの文化的ショックでもあった。秋成が、この「ソングラス」で実際に月や日を観たかどうかは分からないが、その驚くべき威力を持つている実体の存在は知っていたのである。秋成が宣長を批判するにあたって、この「ソングラス」を持ち出す合理主義的な理論を用いたのである。

秋成の合理主義的考え方の理解のため、もう一つの事例を挙げてみる。

こゝに阿蘭陀國の畫圖は、其物をよく見あきらめて、其形の大小高低を計り、尺に度り、遠近浮沈暗光に附て、美醜のいたはりなく、もはら寫生を事とすれば、さらに展觀の望なき物なり。此國の人性貪利萬國に超ゆ、凡大世界の内舟楫の到らむ限は、往廻りて交易を事とす、是が往返の便に圖せし地球之圖といふ物を見るに、文字以て事理の通ふ國は少にて、其餘は國號をさへ聞知らぬが多く、しかも地形廣大なるが見えしが、此圖中にいでや吾皇國は何所のほどと見あらはすれば、(13)

以上は、『阿刺霞』に出る、「日神」について宣長との間に行なわれた論争中、秋成の主張の一部である。ここで、秋成はオランダ人の作った「地球之圖」をもって、宣長の説を批判している。これについて、宣長は次のように反駁している。

畫の論はこゝに何の用かある、又阿蘭陀の人物の論も用なきことなり、さて萬國の圖を見ることを、めづらしげにとくしくいへるもをかし、かの圖今時誰か見ざる者あらん、又皇國のいとしも廣大ならぬこともたれかしらざらん、凡て物の尊卑美惡は形の大小にのみよる物にあらず、

これを見ると、宣長は、秋成の言う「地球之圖」を「萬國の圖」と勘違いをしているのが分かる。秋成の言う「地球之圖」は、当時掛け軸などに使われていた「萬國の圖」ではなく、オ

ランダ人が世界の各国を相手にして交易をするため作った、緻密な航海用の地図であった訳である。

以上、秋成の合理主義的考え方を理解するため、「ソングラス」と「地球之圖」を中心に考えてみた。「ソングラス」と「地球之圖」は、言うまでもなく、科学的知識を要する実体的存在であり、観念の対象ではない。科学的知識は、経験と普遍そして合理性を要求する。秋成の合理主義的考え方は、「ソングラス」と「地球之圖」に代表される、このような科学的知識ないし経験から養われたと思われる。従って、宣長を、文献を最優先視する絶対的合理主義の持ち主と言えらば、秋成は、経験及び常識を重視する相対的合理主義の持ち主と言えらる。

秋成の科学的知識、そしてそれによって養われた合理主義的考え方は、蘭学によるところが多かったと思われる。秋成中年の作品『癩癩談』にも、

大名仕立の町人あれば、阿蘭陀おさへの機関士あり。蛮学、天文、投壘、盆石、琵琶、明楽、世にすたれたるあそびもひろふ神のまもりはありけるものを、

と、「蛮学」の名が見えるし、『諸道聴耳世間猿』二下巻㊦

「呑こみは鬼一口の色茶屋」にも、
今一人ハ与左衛門、是はいつその丸はだか。せめて禪引しめて、袂はこ覆の青漆皮、鼠の喰入首の入るだけ切あけて、それをすこしの肩ふせぎ。蛮国の圖にもない二人がすがた。と、「蛮国の圖」云々という描写が見え、秋成と蘭学との関係

をうかがわせる。

さて、以上によって、既述の『諸道聴耳世間猿』に見える現実主義的・合理主義的傾向は、単なる浮世草子の持っているリリスティックな性格の継承ではなく、そこには、秋成自身の合理主義的な考え方、言い換えれば、彼の文学的背景がある、と言える。そして、このような事実は、他の作品、例えば、『書初機嫌海』や『癩癩談』『胆大小心録』などに見える、秋成の文学的背景の理解に役に立つものと思われる。

四

以上、「きつね」と「ソングラス」を中心にして、秋成文学の背景を考えてみた。秋成文学の背景には、「きつね」に代表される妖怪信仰と、「ソングラス」に代表される合理主義思想があると言える。そして、それらは相容れられない対立する概念であるけれども、秋成においては、うまく共存しているし、それがそのまま彼の作品の世界に現われていると言える。

そのことは、秋成の晩年の作品『自伝』によく示されている。近き頃神代がたりを傳へ得しとて、さかしげに説き聞えし人ありき、是はきつね狸ならずて人の人を魅する也、その教子の中にわきて笑ふべきは、月日は此國にて成りたる神にて萬邦を照らし給へば、この御光にあたらん者は千萬里を厭はず通ひ参りて、君と申して仕ふべき者ぞと、蠻の國

の制にてソングラスと千里鏡もて月日を見れば、日は火の
炎たて、燃え上るに同じく、月は池波の風に立ち騒ぎたる
に似たるよ、(14)

以上は、前述の『胆大小心録』と同じ内容であるが、秋成はこ
こで宣長の主張を「ソングラス」をもって反駁しながら、彼の
行為に対して「きつね狸ならずて人の人を魅することだと、
宣長批判に「きつね」と「ソングラス」、即ち、対立する二つ
の概念を用いているのである。

注

- (1) 浅野三平『新潮日本古典集成 雨月物語 癩癖談』
新潮社 一七〇〜一七一頁(以下『癩癖談』の引用は、同
書による)。
- (2) 中村幸彦『日本古典文学大系 上田秋成集』岩波書店
六六頁(以下『雨月物語』の引用は、同書による)。
- (3) 注(2)と同じ。一八八頁(以下『春雨物語』の引用は、
同書による)。
- (4) 注(2)と同じ。二七二頁(以下『胆大小心録』の引用
は、同書による。なお、番号は同書のをそのまま使う
ことにする)。
- (5) 平重道他『日本思想大系39 近世神道論 前期国学』
岩波書店 三八九頁。
- (6) 注(4)と同じ。二五八頁の注一〇。

(7) 森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釈』国書刊行会
三三頁。

(8) 藤井乙男『秋成遺文』国書刊行会 一五四頁。

(9) 『上田秋成全集』第一 国書刊行会 二二六頁。

(10) 松村明『日本古典文学大系 戴恩記 折たく柴の記
蘭学事始』岩波書店 四八二頁。

(11) 『有朋堂文庫 直毘靈 馭戎慨言 靈能眞柱』
有朋堂書店 四六六頁。

(12) 『日本隨筆大成』(第一期) 20 吉川弘文館
六八〜六九頁。

(13) 注(9)と同じ。四二五〜四二六頁。

(14) 注(8)と同じ。二六一頁。

(本学大学院博士後期課程)